



## 明治 6 年に建立の大雄寺の養育院『義葬之家』について

稲松孝思

養育院は明治 5（1872）年に創立された東京の福祉・医療施設である。当初は鰥寡孤独の人を収容する施設であったが、150 年近い歴史の中で各種福祉・医療施設に発展分化した。その歴史については、養育院 60 年史、70 年史、80 年史、100 年史、120 年史が編まれている。大久保一翁がその設立に、渋沢栄一が、半世紀以上に亘ってその維持・発展に大きく貢献している。「養育院」の文献資料の一部は残されているが、明治・大正期の建造物など、施設の多くが木造であり、関東大震災、先の戦災、施設の引っ越しなどで、形あるものはほとんど失われている。同時期に渋沢が関与して創設された富岡製糸場が、今日、世界遺産として残されているのと好対照をなす。そこで、僅かに残されている養育院史を語る、“形ある物”のうち、もっとも古い、谷中の大雄寺にある『義葬之家』について述べる。

### 黎明期の養育院

明治 5 年 10 月、ロシア大公アレクセイを国賓として迎えるに当たって、急遽収容された浮浪者を本郷の加賀藩上屋敷の空き長屋（現東京大学）に収容した事が、養育院事業のはじめとされる。五日後に収容者は浅草溜に移され、長屋は事務所として使用されたが、その痕跡はない。明治 6 年 2 月、上野の護国院の一部（現東京芸術大学美術学部）を買い取って恒久施設を建設し、大久保一翁府知事が開院時に視察しているが、その痕跡もない。漢方の町医村上正名が任用され、健康問題に対応したが、同年 12 月までに 104 人が死亡した。遺骨の引き取り手がなく、賄方赤井善蔵の菩提寺、台東区谷中の真言宗・大雄寺に葬り、「義葬之家」が建てられた。この「義葬之家」が、明治初期の養育院を語る唯一の“形ある物”である。

- 明治 5 年 10 月、ロシア王子アレクセイの来日（国賓）
- 東京府内の浮浪者を加賀藩上屋敷空長屋に 250 人収容
- 5 日後、浅草溜め移管、長谷部
- 明治 6 年 2 月、上野・護国院の一部を購入、改装し養育院恒久施設開院
- 大久保一翁東京府知事視察
  - 鰥寡孤独痲疾の者を収容
  - 養育院掟書：伍長規則、看護人規則、患者の心得、食堂規則、浴室規則…
  - 賄：赤井善蔵
  - 町医：村上正名、医療担当
- 引き取り手のない遺骸を赤井家の菩提寺大雄寺に埋葬
- 明治 6 年 12 月合葬塚建立 104 名

### 大雄寺（ダイオウジ）について

大雄寺は、台東区の谷中霊園の近くにある日蓮宗の寺院であり、地図に示すように、JR 日暮里駅より徒歩 8 分のところにある。慶長 9 年(1604)、神田土手下に創建され、万治元年(1658)に現地へ移転。境内には、推定樹齢 200～300 年の都内最大級のクスノキ（幹回 6.2m、樹高 13m、枝張 12m）があり、「台東区みどりの条例」保護樹木に指定されている。春には枝垂桜が美しく、四季折々の風景を楽しめる。幕末の三舟の一人、高橋泥舟のお墓がある。

明治 5 年に「養育院」が作られたとき、その賄を赤井善蔵が受注した。養育院収容者が亡くなり、御遺体の引き取り手が無い場合、赤井が、自身の菩提寺である大雄寺に頼み込み、葬ったのがそのはじめである。境内には赤井家の大きなお墓がある。



左手の墓地の奥に、隣との境界のブロック塀に接してお墓がある。高さ 151 cm の扁平な角柱型の三段墓である。正面には『義葬之家』と彫ってある。無縁墓の意であるが、「義葬」・・・に、この塚を作った人の思いがにじむ。隣家との境のブロック塀に近接する墓石の裏に、なにやら彫ってあるが、全体は読めない。狭い空間にカメラを差し込んで、何とか全体を判読した。『明治六年癸酉始養窮民於養育院其死者葬此』と彫ってある。「明治 6 年に養育院ではじめて窮民をお世話したが、そこで亡くなった人をここに葬った。明治 6 年」という意味である。

住職にお願いして寺の過去帳を拝見した。古ぼけた霊簿に当寺に葬られた諸霊が墨書されているが、その中に養育院関係の 104 名の記載がある。

年齢、性別なく、戒名は6名に付され、他は俗名である。姓はなく、吉蔵や常女などの名前だけが記載されている。名前から性別を推測すると、男 81 名、女 22 名、不明 1 名である。



ちなみに養育院 60 年史を紐解き、年齢記載がある 22 名の死亡者についてみると、1-20 歳 3 名、21-40 歳 11 名歳、41-60 歳 5 名、61-80 歳 6 名、不詳 1 名であった。この義葬之家は養育院創立当時の唯一の遺構である。長年この塚を東京都で維持し、春秋に香華・卒塔婆を手向けてきたが、養育院廃止に際し永代供養の手続きをした。平成 22 年には『養育院を語り継ぐ会』の由来碑が立てられた。

なお同寺境内には、勝海舟、山岡鉄舟とともに、幕末の三舟と言われる高橋泥舟も葬られている。勝、山岡の幕末における活躍は有名であるが、高橋はあまり知られていない。本名は高橋精一郎であり、山岡鉄舟の義兄にあたる。旗本の槍の名人で、徳川慶喜の側近であった。江戸開城交渉で西郷との交渉を勝に託されたが、慶喜の警護役のため、交渉を山岡に託したという。維新後は、徳川家に節を通し、骨董の鑑定や書を以って糊口とした人である。ちなみに、旧旗本であった、勝麟太郎：海舟、山岡鉄太郎：鉄舟、高橋は“かちかち山の泥舟さ！”と「泥舟」と称した。3 人とも書を良くし、維新後は多数の墨蹟を残したため幕末の 3 舟といわれている。ちなみに大久保一翁（勝海舟を世に出した人、江戸開城時の若年寄、養育院を作ったときに東京府知事）は石舟（？）、幕末、明治初期の外交官として活躍した田辺太一（遣米、遣欧、岩倉使節団）は蓮舟、木村喜毅（咸臨丸提督、幕末の勘定奉行）は芥舟と号している。幕末に江戸幕府の高官であった人たちの号の舟尽くしに、なにやら意味深長なものを感じている。



義葬之家 背面の記載  
明治六年癸酉始養窮民於養育院其死者

